

# 薩摩川内まごころ文芸コンクール

いつも心の眼でみている人がいる。  
 いつも心の耳を澄まして聞いている人がいる。  
 いつも心の口で話している人がいる。  
 そんな人は  
 いつも喜んでくれるらしい。  
 いつも感謝しているらしい。

海外、北海道から  
 沖縄まで寄せられた  
 まごころの数11,141点。  
 このまごころが、  
 戦いや憎しみ合いのない  
 ゆったりとした社会を  
 きっと築きます。  
 人の心の中に築かれるまごころの  
 若は永久に壊れることは  
 ありません。



## 「おまえ、佳織だろ！」

鳥取県 農業  
 漆原 正雄さん (23歳)



彼女の親父さんは口数が少なく、どこか意固地なところがある。  
 何度か夕食に招かれた。気に入ってほしい一心でたくさん話しかけるのだが、固く引き締まった口元はくすりともしない。反対にお母さんはとても優しい人で、本当はあなたと仲良くしたいはずなのよと、いつも慰めてくれる。そんな親父さんとお母さんの結婚式に招待された時のこと。  
 その日、メッキ加工工場で働く親父さんは慣れない正装に、何だか居心地が悪そうだった。格好いいですよと僕が話しかけても、岩

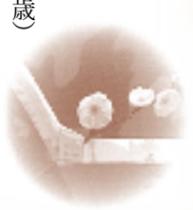
のような顔つきはちっとも崩れない。ホテルの入室の会場には、親類を始め、仕事に関係した人達でごった返していた。格式張った挨拶があり、親父さん達の馴れ初めを振り返り、娘である彼女が涙ながらに感謝の手紙を読み上げた。そうしてアルコールが回ってきた人も出始めて、場内が二次会的な空気に変わった頃、誰かがちょっとしたゲームを思いついた。親父さんに目隠しさせ、握手のみで十五、六人ほどの女性の中から奥さんを当てる、という趣旨のものだった。親父さんは明らかに乗り気ではなかったが、工場

長に無理やりネクタイで目隠しさせられて、泣々、女性の手を握り始めた。みんなが必死に笑いを噛み締めて見守る。僕と彼女も顔を見合わせ、一体誰に告白するんだらうねとささやき合った。それは十一人目の時だったか。しゃがれた声が「佳織！」と、ぶっきらぼうに叫んだのだ。  
 「おまえ、佳織だろ！」  
 会場全体がしんと静まり返った。なぜなら親父さんが握り締めていた手は、まさしく妻である佳織さんのそれだったのだ。先ほどまで茶化していた人達が、急に真面目な顔で拍手し始めた。万雷に近い音が響く。親父さんは、目隠ししたまま白い歯をこぼした。照れ臭そうだ。お母さんが声を押し殺して、泣いている。  
 僕と彼女は互いに手を握り、夫婦っていいもんだねえと言いつつ合った。



## いのり

奈良県 主婦  
 才加志 順子さん (60歳)



参道には黄色くなった木の葉が風で舞い、小雨が降っていた。私は入院している主人の為に百度を踏みむ。もう何度この境内をお願いして廻った事だろう。この日も心を無にしてひたすら主人の事を祈りながら百回廻った。今日に限り、「おみくじ」が目止った。いつもは主人が心配するので一分一秒を競って急な坂を駆け急ぐのだが、何度もこの神社でお願いしているで自分自身を安心さす為におみくじを引いた様な気がした。おみくじが入っている木箱をあこれと見ながら、覚悟を決めて一枚を取り出す。歩いた後なので背中汗をかいていた。広げながら手が震えた。安心する為にひいたおみくじは、「凶」の一字。  
 病、治らず、願、叶わず。背中が冷たかった。私は人目も気にせず、大木の下に座り込み泣いた。どうして今頃おみくじを引いたのだらうと後悔した。神木は大きく葉を繁らせているのにも関わらず雨から私を守ってくれず、そして今、心の灯までも消した。

いは叶うと書き直したいと思った。切なくて悲しくて苦しくて、悲惨な言葉が雨で濡れた私の上をずしりとのかかる。私は重さで息もできない。  
 暗い深い大きな穴の底にひとり立っている気がした。天は遠い。主人が気になり泣き泣き病院へ急ぐ。入るなり、末期ガンでやせ衰えた彼は、わずか半年前の力強さは全く無く、別人の様にベッドに横たわり、弱々しく、「どうしたんや？ 又一人で泣いたんか？」  
 この一言で心配さすまいと我慢していた涙が溢れだし、主人に抱きついて泣いた。何も言えず、子供のようになんか泣きじゃくった。「可哀想にな」と私の顔を何度も何度も撫でながら主人も泣いている。暫くして主人は私の肩を抱き、窓の外を止む事を見ない冷たい雨を二人して無言で見ていた。夫はあの時何を思っていたのだらうか。  
 それから何日かして夫は私の名を三回呼んで一人旅立ってしまった。雨より冷たい小雪の降る深夜の事だった。



## おとうと？ いもうと？

鹿児島県 薩摩川内市立平佐西小学校1年  
 外園 亮之介君 (7歳)

ぼくは、まだ一人っ子だ。でも、もうすぐ一人っ子じゃなくなる。それは、いまぼくのおかあさんのおなかのなかに、おとうとかいもうとがいるからだ。  
 おにいちゃんになるってふしぎだ。だっていままでずっと一人っ子だったからだ。おにいちゃんになるって、なにかかわるんだらう。ごはんがはんぶんになったり、ジュースがはんぶんになるのかなあ。  
 「うまれたら、いままでぜんぶりょうのすけのものだったけど、いろんなものがはんぶんこになるんだよ。」って、おかあさんがいうから。まだなにかかわるかかわらないけど、はんぶんこが、たのしくなりそうだな。うまれたらしてあげたいことがある。それは、一ばんめにだっこだ。だっこをして、いえのまわりをあんないしたい。  
 「ここがおばあちゃんのおうちだよ。」とか、  
 「ここをとおってがっこうにいこうっておしえてあげたい。  
 二ばんめに、おんぶだ。おんぶをし

て、きんじよの人にあかちゃんをしようかいしたい。  
 「ぼくのきょうだいだよ。」  
 っておしえてあげたい。  
 かんがえてみるといっしょにやりたいことがたくさんある。  
 いま、おかあさんのおなかのなかで、あかちゃんをなにかんがえてるんだらう。  
 「うまれたら一ばんめにこれがしたい。」  
 とかかんがえているのかなあ。だしたら、ぼくがぜんぶかなえてあげる。だってぼくのたいせつなきょうだいだから。  
 だから、ちよっぴりしたい。ぼくのみらいのきょうだいは、おとうと？ いもうと？

## 薩摩川内まごころ文芸コンクール



\*そのほかの入賞作品も不定期で紹介予定です。